

北海道がんセンター 遺伝子先端医療外来

Case 1

遺伝子の変異を調べて選択肢を増やす遺伝子先端医療外来

北海道がんセンター

慎重な対応が必要ながんの遺伝子検査

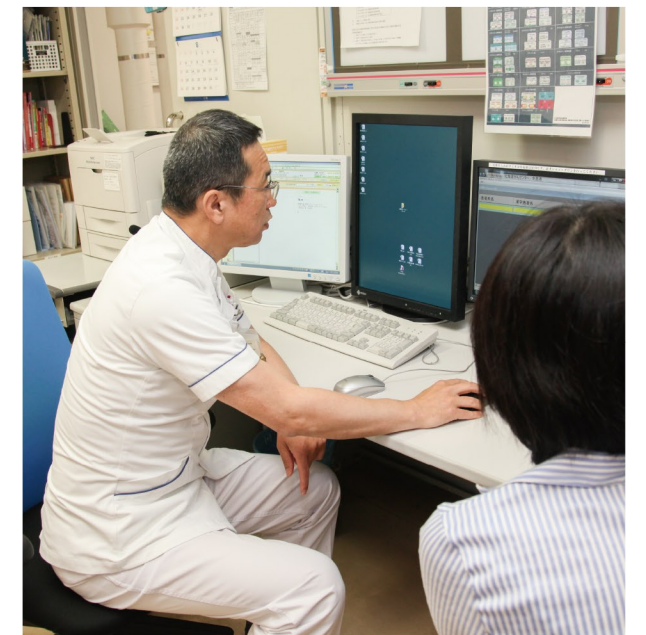
遺伝子研究の進歩によって、特定の遺伝子に変異があるとがんになりやすいと証明されています。乳がんの場合は BRCA1 と BRCA2* という遺伝子に変異があると、70 歳くらいまでに約 70% の人が乳がんを発症します。

北海道がんセンター(札幌市)は、乳がんに関わる特定のがん遺伝子を調べるため、北海道内で最初に専門の遺伝子先端医療外来を開設しています。高橋将人副院長は、「がんになる可能性がわかるという倫理的な問題があるので、慎重な対応が必要です」と話します。遺伝子先端医療外来ではカウンセリングを行い、遺伝子検査を受けることが適切と判断した場合にのみ、検査が実施されます。そして、遺伝子の変異が見つかった場合は、今後の対応についてさらにカウンセリングが行われます。

がんになる前の選択肢を提供

日本では新たな乳がんが年間で9万件ほど発生しており、そのうち5～10%は遺伝子の変異によるものといわれています。また、変異した遺伝子は1/2の確率で親から子へと受け継がれます。こうした遺伝による乳がんは、若くして発症しやすい、両方の乳房にできやすい特徴があり、高橋副院長は、「乳がんの原因となる遺伝子の変異の有無を知っておくことは、本人はもちろん、血縁者の方々にとっても有用です」と話します。

遺伝子先端医療外来で遺伝子の変異を確認した場合、がんのリスクを減らすため、医師が乳房の切除を提案することがあります。ただし、



診察室で相談者に対応する高橋副院長

切除しないという判断も選択肢のひとつです。

「遺伝的なリスクを調べることで選択肢を増やすことができます」と高橋副院長は遺伝子検査の意義を強調します。今後、遺伝子検査の拡大により膨大な検査データが蓄積されると予想されています。そのデータを活用することで患者さんごとに効果的な抗がん剤治療が見つかる可能性が高まるなど、遺伝子レベルでのがん治療が劇的に進歩するのではないかと期待されています。

*がんを抑制する遺伝子。この遺伝子に変異があるとがんを抑える力が弱まり、乳がん以外に卵巣がんも発症しやすい

「医療の進歩はすさまじいので、治療を諦めないでほしい」と高橋副院長



特集
feature

より良いがん診療を提供するために

国立病院機構(以下、NHO)では、都道府県が策定する医療計画を踏まえ、がん治療に取り組んでいます。今回はそうした中から、都道府県の中核病院として厚生労働大臣が指定した病院である、“都道府県がん診療連携拠点病院”にスポットを当て、高度ながん治療を紹介します。

四国がんセンター
内視鏡手術支援ロボット
da Vinci(ダヴィンチ)

九州がんセンター
高精度放射線治療